

評価項目	評価単位	評価のまとめ
A 普 通 教 育 課 程 を 行 う 学 校	1. 教育目標	○「自主協同」の具体的な3つの目標について、研究テーマである「公共性」を育むことに焦点を当て、他を排除せず認めあい学びあう子どもの児童像を追求した。
	2. 教育課程の編成	○研究開発の研究の重点を学習分野の指導に置き、時数配当や時間割の変更などを、学年単位で柔軟に行った。
	3. 年間授業日数・時数	○年間授業日数・時数を確保するため、都民の日や始業式の日に授業を行うなど、時間設定を工夫した。
	4. 教育活動とその成果	○各学年毎に、児童の実態を踏まえて教育活動を展開した。
	5. 行事	○教職員間の共通理解を深め、見通しを持って計画的に準備や練習を進めた。 ○「公共性」の育成を意識し、子どもたちの創造的な活動や異学年交流の活動を重視したが、新型インフルエンザの流行に対応して、行事の持ち方を柔軟に検討し、変更して行った。
	6. 進路指導	○一人一人の子どもに応じた進路指導を、教員と保護者がよく話し合う機会を十分に持ちつつあるが、必ずしも教員と保護者の意見が一致することばかりではない。 ○帰国児童教育学級の子どもたちについては、海外生活を生かした広い視野から進路選択ができるように、進路関係の保護者会や個別の面談を持つようにした。 ○小中連絡進学に関して、中学校への内部進学者の現状について小学校時代からの情報をお互いに出し合っ、今後のあり方を協議し始めた。
	7. 研究・研修	○本校版「公共性育成要領(仮称)」を作成し、2年次の研究成果として要項にまとめた。 ○教員の対話を深める校内研究会の工夫をした。 ○大学の助言者と連携して、研究を深めた。
	8. 帰国・国際教育	○帰国児童教育学級のあり方を検討した。 ○帰国児童支援室の時間を大切に、担当者が持ち回りで指導に当たった。
	9. 幼児・児童・生徒への支援	○「配慮を要する児童」への理解を、学年を超えて共有するために、学期に2回の「児童理解」の会を実施した。今年度はスクールカウンセラーにも同席してもらい、意見を聞く機会を持った。 ○週1回の部会にスクールカウンセラーにも同席してもらい、随時児童の情報を交換した。 ○「特別支援校内委員会」を発足させ、特に配慮を要する児童について、具体的な指導方針を明らかにした。
校 園 と 校 舎 の 運 営	1. 経営・組織	○大学や附属校園と連携した学校運営や教育研究を、連絡を取り合いながら進めることができた。だが、研究面をもっと充実させたい。 ○校務分掌や学年経営については、運営委員会で調整しながら、部会を定期的に開いて進めることができた。
	2. 出納・経理	○副校長が主幹教諭や事務員と経理を行うが、説明を丁寧に行い、教員全体の関心も高めていった。常勤の事務職員がいるともっと円滑に処理することができる。 ○運営交付金が減少する中、小学校運営基金との支出バランスを考えながら、教育効果を高める支出をした。安全確保のため、大学の資金で校舎内の施設整備をしてほしい。
	3. 施設・設備	○全教員による月1回の安全点検や月2回以上の巡視を実施し、児童の生活に支障や危険がないかをチェックした。 ○緊急性のある補修箇所は、大学施設チームと連携して早急に対処した。 ○トイレ照明の増設や砂場の砂の入れ替え、その他児童の生活に直接役立つものを優先して実施した。
	4. 健康	○健康診断の結果を生かし、児童の健康増進に役立てた。 ○保健室登校児童など授業に参加することが難しい児童には、養護教諭やスクールカウンセラー、担任が連携をとって対処した。 ○特に新型インフルエンザへの対応として、集団での活動の自粛や手洗い・うがいの指導を徹底した。
	5. 安全	○定期的に月1回避難訓練を実施し、様々な条件下の災害に迅速に対応できるよう指導をした。 ○警察の協力をいただき、不審者対応訓練や防犯教室を実施した。 ○起震車体験訓練や煙体験訓練を実施し、地震や火事の際の対処について指導した。 ○通学班別会を実施し、通学中の安全やマナーについて、定期的に指導した。
	6. 情報	○情報発信とセキュリティーポリシーを、さらに強化していきたい。 ○児童がコンピューターを有効に活用しているが、フィルターをかける必要がある。 ○緊急メールシステムは、有効に活用されている。
	7. 開かれた学校	○教育視察や学校参観、授業参観、研究調査、内地研修生を数多く受け入れた。 ○外部教育機関へ講師を派遣したり、研修場所を研究団体に提供したりした。 ○事務室や生活安全部、情報部、PTA役員などと連携し、安全を最優先しながらさまざまな来校者を迎え入れた。
	8. 入学検定	○学校説明会では、研究開発学校や大学附属の研究機関としての本校の使命を説明して、理解を得るように努力した。 ○入学検定の出題のあり方や制度、当日の教員の役割分担については、適切な評価を行い、次年度に改善したい。
	9. 1保護者との連携	○保護者会や面談等を通じて、教員と保護者との共通理解を深め、協力し合っって児童の教育活動を進めた。 ○学校での教育活動をより豊かなものにするために、保護者ボランティアの技能や経験を児童の学習活動に生かした。 ○保護者アンケートの結果を生かして、教育活動の改善を図った。
9. 2学年活動	○情報交換を密に行いながら指導にあたったが、インフルエンザへの対応のため、活動の幅が狭く成らざるを得なかった。	

評価項目	評価単位	評価のまとめ
B 大 学 の と の 附 属	I. 1. 連携研究	○大学の先生方と継続して研究を深めた。その研究成果を、研究紀要第2集にまとめた。 ○5 附属連携教育研究の部会を定期的に関き、協議した。
	2. 授業交流	○他大学や小学校教員、学生の参加が増え、9回の授業研究会を開いた。
	3. 教育実習	○本学学生16名と日本女子大学学生4名を受け入れた。大学の指導教官にも参観等の協力を得ながら、実習生には教職への理解を深める場を提供した。 ○栄養教諭の教育実習は、時期も含めて課題を見直し、大学とも連携しながら、より充実した内容になるよう改善していきたい。
	4. 専門委員会等	○各種委員会では、積極的に意見交換と議論を行った。 ○教育研究推進専門委員会では、今後の5附属連携研究のあり方について検討した。
	5. 大学の講義担当	○附属小学校の研究や指導法を生かし、現場で役に立つ情報を提供することができた。 ○授業時数の多い教員には、負担が大きい。
	6. インターンシップ	○発達臨床の学部学生を14名受け入れ、保健室における子どもの対応等を通して、児童理解を深める場を提供することができた。
学 校 園 と し て	II. 1. 授業参観・研修生受け入れ	○月ごとの授業研究会には、3～20名の参観があった。HP上での広報の効果があがった。
	2. 公開研究会開催	○第72回教育実際指導研究会では、授業と話し合い、分野別協議会を提案した。
	3. 初任者研修・現職研修	○参加型として有意義であったが、参加者を増やすには開き方を検討する必要がある。
	4. 途上国教育支援	○途上国の教育関係者からの参観を受け入れ、授業参観や児童との交流などを行った。
	5. 出版活動	○「公開研究会要項」に2年次の成果をまとめた。 ○「児童教育」第20号、「ことば」の合本、「市民」の合本、研究紀要第17集をまとめた。
	6. 各種研究会への協力・支援	○講師派遣実数 年間52回（2月現在）（昨年度36回） ○公開研究会以外の参観者 年間326人（2月現在）（昨年度240人）

平成21年度 学校評価(自己評価)まとめ

◎ 重点目標

- 健康診断の結果やメンタルヘルスの結果、お茶っ子相談室などの活用を通して、保健指導や心のケアの充実をめぐる。
- 児童の安全・安心を最優先に考え、児童の日常生活に支障がある箇所は早期に発見し、迅速に修理・補填を行う。
- 帰国児童教育学級のカリキュラムの検討及び入学検定制度や評価、帰国児童支援室の学習指導の計画・実施をする。
- 給食運営に対する教員の意識を高め、給食を通しての食育がより効果的に行われるようにする。
- 出納・経理面をガラス張りにし、正確にまたスムーズに進められるよう工夫する。

◎ 要望

- 特別に配慮の必要な児童が増えているという実態から、人員の配置も含めて支援をお願いしたい。
- 出納・経理面をもっと円滑に処理するために、常勤の事務職員を配置してほしい。
- 児童の安全確保のため、大学の資金で校舎内外の施設整備をしてほしい。

◎ 改善点

- 大学や附属校園と連携した教育研究をもっと充実させたい。
- 児童がコンピューターを有効に活用するために、フィルターをかける必要がある。
- 入学検定の出題のあり方や制度、当日の教員の役割等について改善したい。
- 栄養教諭の教育実習については、時期も含めて課題を見直し、大学とも連携しながらより充実した内容になるよう改善したい。
- 大学の講義担当は、授業時数の多い教員には負担が大きい。
- 現職研修は、参加者を増やすためには開き方を検討する必要がある。
- 預かり金の出納・経理面をわかりやすく整理する。